モンゴル見聞録 ―約1週間で体験したつかの間のモンゴル―

著者	竹内 佐智恵, 田村 麻紀
雑誌名	三重看護学誌
巻	15
号	1
ページ	83-88
発行年	2013-03-15
その他のタイトル	Report of issue in Mongolia ―My own viewing through short stay―
URL	http://hdl.handle.net/10076/12450

モンゴル見聞録
― 約 1 週間で体験したつかの間のモンゴル ―

竹内佐智恵[1]，田村　麻紀[2]

Report of issue in Mongolia
― My own viewing through short stay ―

Sachie Takeuchi and Maki Tamura

Key Words: Mongolia, history, popular feature

はじめに

モンゴルは近年，民主化による資本主義と豊富な鉱山の開発が後押しして産業化が進んでいる．その副産物として大気汚染をはじめとする公害問題や貧富の格差拡大が問題視されてきている．我々は大気汚染による健康被害を調査することになり，この秋に調査準備のためにモンゴルの各種機関を訪問して調査の準備を進めることになった．私は渡航までの慌ただしい準備のなか，モンゴルの詳細な事情を調べる余裕もなくモンゴル国に入り約 1 週間滞在した．そこで見たことや聞いたことは，私にとって違和感となるものではなかったが，特異な感情を起こすものであった．特異な感情をあえて表現するならば「来るものは拒まず穏やかに受け入れてくれる優しさと，侵入者の動きを静かに見つめる眼光」に感じる不思議な緊張感であった．

そこで，改めてモンゴルとはどういう国なのかを文献で振り返り，現地で見聞きしたことと私が抱くことになった特異な感情の要因を解釈し，今後この国で調査を実施するに当たり調査者としてのあり様を考えてみたい．

1. モンゴルの国土

モンゴル国（Mongolia）は東アジア北部に位置し東と南を中華人民共和国（中国）・内モンゴル自治区と，西を中国・新疆ウイグル自治区と，北をロシア連邦と接する内陸国である．面積 1,565,000 km^2（日本比約 4 倍），人口約 2,600,000 人超（日本比約 0.2 倍）をもち，国土の水面積率は 0.2%と，その大半が草原や砂漠が占める風土である．この数字からはゆとりのある人口密度をイメージするが，約 100 万人を超す人が首都ウランバートルに集中している，典型的な年集中型の国家である．私たちが訪問したのは首都ウランバートル市であったが，市街地では開発が進み（図 1），郊外も密集した風景が多かった（図 2）．市街地中心部では道路の舗装がなされているが市街地や郊外は乾燥した土地が広がっており，道路では砂埃が舞い上がっていた．

図 1　ウランバートル市街の開発の様子

1　三重大学
2　公益財団法人　国際環境技術移転センター

図 2　ウランバートル市郊外のゲル地区の様子

2. モンゴルの歴史

悠然とした風土とは裏腹に，歴史的にみる国家支配の状況は複雑である．13 世紀にチンギス・ハーンが高原の東北部を支配したが 17 世紀から 19 世紀には外モンゴルから内モンゴルにかけて清朝の支配下に置かれた．その後 1911 年の辛亥革命時に外モンゴルの多くの地域の王侯たちがロシアに財政援助を求めながら清からの独立を宣言する一方で，政権はモンゴルにおけるチベット仏教界で最高権威かつ民族全体のシンボルとして君臨していた化身ラマのジェプツンダンバ・ホトクト 8 世（ボグド・ハーン）をモンゴル国の君主（ハーン）とし，国内での支配政権が 2 分するような事態となった．1917 年にロシア革命の勃発に乗じてそれまで静観していた中国が外モンゴルでの勢力回復に乗り出し，1919 年に外モンゴルを占領するに至ったが，1920 年 10 月，ロマン・ウンゲルン率いる軍がモンゴルへと侵入して中国軍を駆逐し，再びボグド・ハーン政権が復興することとなった．しかし，モンゴル侵入時のウンゲルンの残虐な行動に対して庶民が反感を抱き，民族主義者，社会主義者がモンゴル人民党（後のモンゴル人民革命党）を結成し，ソビエトの援助を求めながら 7 月にジェプツンタンパ 8 世を君主としたままモンゴル人民政府を樹立し立憲君主制国家としてスタートさせた．1924 年にジェプツンタンパ 8 世の死去を契機に政体は人民共和国へ変更され，社会主義国としてのモンゴル人民共和国が成立した．モンゴル人民共和国は，1924～1928 年ダンバドルジ政権が，狭量な社会主義政策にとらわれない開明的諸策を打ち出したが，ソ連からの圧力等により親ソ・社会主義が続くことになった．1929～1932 年には政府が厳しい宗教弾圧と遊牧の強制農耕化，機械化，集団化など急進的な社会主義政策をとろうとし，それに抵抗した国民が各地で暴動を勃発させた．この時，多くのチベット仏教僧，富裕遊牧民が暴動の指導者として虐殺された．1934 年にソ連と相互軍事援助協定が締結され，スターリンからラマ教寺院の破壊を要求されたがゲンデン首相は拒否した．1936 年にモンゴル秘密警察が設立されソ連派のチョイバルサンが首長となり大規模な強行ソ連指揮下が敢行された．ゲンデンはソ連に送致されて処刑され，政府・軍部高官・財界首脳等 57,000 人がゲンデン首相に係るスパイに関与したとして逮捕され 20,000 人が処刑された．修道院も破壊され約 17,000 名の僧侶が処刑された．チョイバルサンは 1941 年に縦書のモンゴル文字を捨てキリル文字（図 3）化を図った．これによって革命前は 0.7%だった識字率が 1960 年代には文盲率 0 に至った．これは大きな功績である反面，国民がもつ文化を封印する圧力に相当するものであると感じる．しかし，国民はこの施策を取り入れ，現在も街中の大半の表示がキリル文字であるまでに定着させている．しかし，キリル文字で表現する言葉はモンゴル語を貫いておりまた，最近ではモンゴル文字も復活させ，教育の場でそうした文化的観念を大切にしている様子がみられ，模倣や侵略という受け身による変化ではなく，自らの意思で進化しようとする柔軟性を感じた．

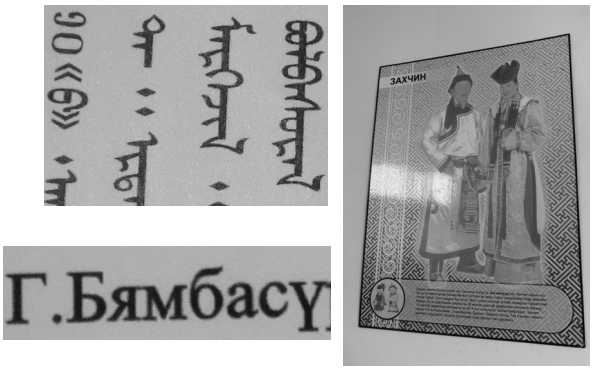

図 3　学校内の表示に使用されていたモンゴル文字（左上）とキリル文字（左下），民族衣装の偉人の肖像（右）

1952 年にチョイバルサンが死去した後，後継者であるツェデンバルが数十年間にわたってモンゴル人民共和国を支配し，1984 年に健康上の理由により書記長を事実上解任された後は，テクノクラート出身の実務派であるバトムンフが書記長に選ばれ，ソ連のペレストロイカに呼応した改革を行った．

近代のモンゴルと外国との戦争は第二次世界大戦中の 1939 年に現在の中国領であるノモンハンで日本軍・満州国軍とモンゴル人民軍・ソ連赤軍連合軍と軍事衝突したハルハ河戦争（ノモンハン事件）のみで，それ以降は殆ど諸外国とは戦争は行っていない．ただし中国とは中ソ対立でモンゴルがソ連を支持したことによ

る政治的対立があり，今なお確執は残っている．1989年末，ソ連・東欧情勢に触発されて1990年春に一党独裁を放棄し1992年にはモンゴル人民共和国からモンゴル国へと改称し，新憲法を制定して社会主義を完全に放棄した．

ただしこのこうした民主化のなかで官僚の汚職が蔓延しているといわれ，国民は常態化した官僚汚職を冷ややかな目で見ているという印象を受けた．

3. ゲル地区での生活

民主化の過程で，国際援助機関の関与により経済成長を重視の急速な市場経済化が進められる一方で，富の公平な配分がなされず社会福祉を削減することとなり貧富の差が拡大した．草原で遊牧生活を営んでいた人々は雪害による牧畜業の崩壊もあり仕事を求めてウランバートルに移住し，郊外にゲルを建ててゲル地区を形成した．ウランバートルでは，一般の人が住むソビエト式のアパートの地域（図4），鉱山ビジネス等で成功した人や外国への出稼ぎで成功した人が住む高級マンションの地域（図5），そしてゲル地区（図6）には低所得層が多いと言われ，居住環境が富の力を反映した顕著な分布がみられている．

図4　車窓からみたウランバートル市街地の様子
（ソビエト式アパート）

図5　ウランバートル市街の様子（マンション）

今回は主にゲル地区を訪問した．

1）家屋

ゲルとは，遊牧民が使用する組立式の家屋である．柱を組み，フェルトで覆い（図7），室内には壁紙様にシルク布を貼ったり，絨毯を貼ったりして風を防いでいる．平均的に壁は5〜6枚分のサイズ（約30m²くらいあったと感じる）で数人の家族が生活するという．暖房はゲルの中央に設置されたストーブを薪を燃料として使用していた．ストーブの下方から点火し空気を送る仕組みになっている．煙突をゲルの屋根から突き出し排気している．夏場は風通しを良くするためにフェルトの一部を巻き上げて通気をしている（図8）．

2）ゲル地区内の環境

ウランバートル市郊外にあるゲルが多数点在する地区では，板塀で囲った範囲を各家の敷地として区分けしている（図6）．一軒家とゲルをもち用途によって使い分けたりゲルのみを住居としたりする場合がある（図9）．番犬を飼う家庭が多く，いたるところで放し飼いの犬がいた．旅行業者の忠告によるとモンゴルでは犬は狂犬病ウイルスを保菌している危険性があるため近寄らないようにと言われている．今回訪問した一家の敷地内にも番犬がおり，私たちが敷地内に立ち入る際には家族が犬を小屋に誘導する間，板塀の外で待機した．

この一家はモンゴル西部の県からウランバートル市内に転居してきており，一軒家を主な居住場所とし，昔使用していたゲルを来客時に使用しているという．

図6　ゲル地区
①密集した場所に構えた居　②斜面に構えた居

図7　ゲルモンゴル作り方
ゲルモンゴル作り方　google検索の写真を引用

図 8　ウランバートル市郊外に居を構える一家のゲルの内部の様子
①天井の柱と壁，②ゲル内の家具，③天井，④薪ストーブ

自家用車を持ちゲルの周辺には多数の生活用具が置かれていた．地区内は道路の舗装もなく，ところどころ窪地があり時折廃棄されたゴミが散乱していた．乾燥しているためかゴミの腐敗臭はなかった．ライフラインは，電気は整備されていたが，水は地区の所定の場所に出向き住民が給水する風景がみられた．地区の衛生環境は必ずしも整備されておらず，窪地（10 月の訪問の際には乾燥のためか河川に水はなかったため，窪地に見えた箇所は降雨時の水流もしくはため池かもしれないが今回の訪問では確認できなかった）にはごみが散乱しているように見えた．乾燥した環境のため腐敗臭は全く感じなかったが，ごみの散乱に見えた箇所が日常生活ごみの廃棄場所になっている可能性もある．また，近辺で地下水か伏流がある箇所では湧水している箇所があり，その量が増えて溜池のようになることもあるというが，これも整備されることはない様子であった（図 10）．

訪問時にゲルの住民に生活の不自由さはないかと尋

図 9　ウランバートル市郊外に居を構えた一家のゲルの外観

図 10　ウランバートル市郊外のゲル地区の地区内の様子
①ゴミ捨て場のようになった場所（乾燥時期に枯渇した河川にも同じような風景がみられた）
②地区内に見られた湧水箇所

ねた際に，この家族はウランバートル市郊外での生活には満足していると話した．

3）ゲル地区とウランバートル市街地の環境の関連

ゲル地区で出す生活煤煙はとりわけストーブの稼働が高まる冬には夜間にゲル地区で多く排出される．冬のモンゴルはシベリア高気圧の勢力圏に位置するため地上風は弱いが東部の草原では西部の山岳部よりも強い風が観測されやすく，近年大規模なダストストームが発生しているとされる．今回 10 月の渡航に際してもその傾向が見られ，帰路，早朝の飛行機からみた空気の動きにゲル地区からウランバートルに流れるもやを確認することができた（図 11）．

図 11　ゲル地区からウランバートル市街地へ流れるもや

4. 医療保健

モンゴルには公立病院と私立病院が有り，公立病院は国立，郡または県の病院そして地区ごとに設置された世帯保健センターとよばれるクリニックのような小規模な施設がある．今回は公立の病院について見聞する機会があった．公立病院を受診する場合は通常は，まず世帯保健センター（図 12）を受診し，そこで精密検査等の必要性を判断された場合に紹介状をもって郡または県の病院を受診し，そこでさらに高度な医療を要すると判断した場合に国立病院（図 13）へ紹介されるというシステムをとっている．しかし，「官僚の汚職体質と同様，国立病院に知人がいる場合にはコネで受診する」ケースもあるという．

国民の健康について保健省では「大気汚染削減に関する問題」「原子力発電の利用と人間保健への影響」「学校給食の改善による子どもの栄養改善」「兵器取引に関する問題」「資源鉱物開発に携わる人々の健康に関する問題」を重点課題としており，国立病院も研究機関として大気汚染と健康の関係について調べる意向を持っているという．しかし，予算の関係等もあり調査が思うように進まないという苦渋の現状にある．

考　察

モンゴル国では急激な経済発展のなかで国民の健康問題や経済格差の問題は確実に大きくなってきており，大気汚染と健康問題はその中の重要な問題の 1 つである．しかし国家的な問題であるにもかかわらず，国の様々な事情もあいまって（特に経済的な問題）実際には健康問題に関する大規模調査は進んでおらず，問題の実態さえ捉えきれていないため具体的な対策は進んでいない．こうした実情に研究者や医療者は強い懸念を抱いているといえる．そのようなときに我々が偶然にもその重点テーマの 1 つの調査を申し出た．先方の

図 12　世帯保健センター

図 13　国立第 1 病院
①外観　②診療科一覧

望みとこちらの申し出が一致しそれゆえ交渉が進んだと見れば当然の構図として交渉が進んだように見える．しかし国家も懸念する問題を他国の研究者が調査を申し出た交渉が単に順調に進んだと捉えることはできるだろうか．もう少し深慮した観念を持つことが必要ではないかと感じる．そこで，私が感じた特異な感情の背景について考察し今後この国での調査に臨むにあたっての配慮について考えてみる．

1.「来るものは拒まず穏やかに受け入れてくれる優しさと侵入者の動きを静かに見つめる眼光」を感じた背景にあるものとは…

モンゴル国が抱える健康問題は産業の発展と表裏一体である．今まさに飛躍的に発展しようとする経済成長の勢いがあるなかで健康問題の解決を優先すれば経済成長に水をさし，経済成長を重視すれば国民の健康を犠牲にせざるを得ないという瀬戸際の状態である．両者を優先しながら問題を解決するための画期的な方法が開発されていない今，健康問題の原因と推測される急成長の産業化は警戒すべきものであると同時に国家の発展のためには無碍に切り捨てることができないものでもあるというアンビバレンツさを伴い，両者の関連性を追求する調査は踏み込みたくても踏み込めない強い葛藤を伴うものであるといえる．我々の申し出は，こうした葛藤やアンビバレンツを伴う問題へ踏み込む第1歩を他者に委ねる機会を作ったのではないだろうか．それゆえ，今後，明らかになる結果が彼らの葛藤やアンビバレンツさを払拭する内容であれば彼らは一気呵成にその後の調査へと発展させるだろう．私は騎馬民族の素地をもつ彼らに攻勢の時期を伺う静かな闘士を感じた．

さらに，今回，モンゴルの歴史を調べ現地で見た様子を振り返るなかで，彼らが幾度となく他国の侵略を受け文字さえも変更するという体験を持ちながらも，教育の場では地道に文化復活への布石としてモンゴル文字の掲示や歴史的文化の紹介をしている現場を目の当たりにし，文化継承を重視する姿勢を感じた．

今回の調査に対しても，調査結果にモンゴル事情をいかに考慮した示唆を示すかという我々の姿勢に大いに関心を寄せているのではないだろうか．

2. 我々がモンゴルで調査を行うにあたって心に留めるべきこととは…

我々の調査は小規模な基礎的調査であるが，その結果はモンゴルの抱える問題に楔を打つきっかけになるものかもしれない．このことを十分に意識し，同時に，モンゴルの研究者たちがこの問題にどのように取り組むかを見定めているエネルギーと有効な融合が図れるよう，結果の提示に際しては連携をとっていく必要があると感じた．発展と問題の狭間にある国の国民感情に配慮し，結果に対する彼らの意向をよく聞きながら他国での調査および結果公表を心がける必要がある．今回の資料作成を機に改めてその国への配慮の重要性を思い起こした．

参考文献

金岡秀郎（2012）：モンゴルを知るための65章（第2版），22－37，明石書店，東京

太田千絵（2008）：モンゴルンルン，16，26－27，イカロス出版，東京

ゲル　モンゴル　作り方　― Google 検索 2012／10／31 検索

キーワード：モンゴル，歴史，国民性